

## 言 語

中 井 正 一

神は人間を社交的存在として創るにあたつて、その共在者と共同生活を營む欲望と必然とを與へたるのみならず、又社會の大なる惠助となり共同的紐帶となる處の言葉の能力をも與へた。そしてそれが理念を表示し又説明する役目をもつところの言葉の起元であると言ふニツツはその *Novaux Essais* に叙べてゐる。<sup>(1)</sup> このことは彼がこの場合ホツプスを意識してゐたことに興味あるのみならずニュートンに對立して大陸に或は寧ろ獨逸に滿ちあふれたイデアリスムスの潮の兆として注意を引くものがある。

たとひその起元を神に持たずとするも私達が幼兒の物語の意味なき言葉を聽いてゐる時、その欲するところの意味を傳へんとする熱心さと了解せんとする私達の心持を内省して深い思ひに耽らしめられることがある。亡びゆきたる遠き言葉より今地上に行はるゝ凡ての言葉、或は社會の種々なる地層に行渡つて語らるゝ社交的なるものより暗語に至るまでの言葉の影の凡てがこの幼兒の意味知れざる言葉に關連し、その理解せんとし又されんとする意志がその諸々の文化、或は思惟の核心的なるものにまで迫つてゐることを感ずる時、人

類の運命に對する寂しい愛をすら懐かしむるものがある。

ヅントは幼兒がその發育の初期に於いてすべてのものを把握せんとする本能のあることを指摘し言葉とは距たりたるものゝ把握 „Greifen in die Ferne.“ の本能であること<sup>(3)</sup>。この把握が無限なるもの無限に遠きものゝ把握 begreifen にち<sup>(4)</sup>び發展するとき人間はおよびなき願を犯し、言葉は概念にまで容を變へるものではないか。

一

言語はその表現作用が視覺作用としての文字、聽覺作用としての言葉に依ることによつて、知覺形式の世界に於いても第二次的性質をしか持ち得ず又その内容も概念に對して或はコーヘンに於け

る如く遞減的相對概念と成り、或はフツサールに於ける如く内容志向の只記號的なる位置をしか持ち得ない運命をもつてゐる。

この事は美學的立場に於いて殊に文學の表現形式としての言葉の決定的位置をして極めて曖昧なるものとしてゐる。例へば文學に於ける具象性 Anschaulichkeit の問題に在りて、言語の具象性を或は單なる音響としての聽覺作用として取扱ふことによつて不純なる音樂的具象性の位置にそれを陥れ、或は言語を單なる傳達器 Vehikel としてそれによつて喚び起さるゝ内容が感覺像である場合をもつて文學的具象性とし、言語それ自身の藝術的意味をすら否定し去らんとするに至るときが即ちそれである。このことは言語の思惟への連続と相關して文學上、引いては藝術一般の形式及内

容の問題に種々なる困難をもたせさせてゐる。<sup>(5)</sup>かくて言語の研究は概念的思惟の世界に於いてのみならず、藝術の領域に於いても重要な問題を提出し寧ろ意識の種々なる方向に放たれたる迷路に於ける一筋のアリアドネの糸とさへもなつて我達の前に横る。

言語の聽覺的研究についてはヘルムホルツ、ケラー、<sup>(7)</sup>エーレンシユ、<sup>(8)</sup>スツンプ等<sup>(9)</sup>の完全ではないにしても進みつゝある研究がある。反之、言語の記號的線描としての視覺的研究に就ては不幸にして餘り重要な研究を私達は持つことができない。言語の概念的意味志向的或は形而上學的立場に於ける研究については既にライブニッツ<sup>(10)</sup>によつて重要な研究が遂げられ、ヘルデル<sup>(12)</sup>を経てロマンタイク派の人々シユレーゲル、<sup>(12)</sup>シエリング、<sup>(13)</sup>フン

ポルト、<sup>(14)</sup>等によつて深い關心が持たれ、近代ではそれをカントの考へ方に結びつけんとしたコーヘンの注意すべき努力並にその好きエビゴーンとしてのカツシラーの研究を私達は持つてゐる。<sup>(15)</sup>現象學的研究としては極端に心理主義的であるマルテイーの<sup>(16)</sup>文法學、それとボレミイクを互に交はしてゐるフツサールの<sup>(17)</sup>純粹文法學への意圖等、又その他マウタイネルの<sup>(18)</sup>廣汎なる哲學的と云ふよりも寧ろ文學的なる研究を私達はもつ。この中でもマルブルグ派の考へ方がコーヘンに於いてもカツシラー<sup>(20)</sup>に於いても近密なる關聯をライブニッツに持つてゐるに、又この派に對して激しき對立をなす現象學的研究が又親しい關係をボルツァノ<sup>(21)</sup>を終てライブニッツにもつて居りカツシラーのそれに於ける如く又マンケの<sup>(22)</sup>如きがライブニッツについて

の研究をものせることは深い興味をこの言語の研究の前途にも投げるものがある。

この概念的或は志向的意味の立場に交索して成り立してゐる言語の藝術的意味の立場についての研究は韻律、押韻、文章論、或は有ゆる文學的美學の研究と相俟つて甚だ多量ではあるけれども而も未だ明かにされざる曠茫たる原野を展開してゐる藝術的意味が論理の餌食となるときは常に *Post-mortem* ではある、しかしそれは美しかりしもの屍である。この事は殊にこの種類の研究に伴ふてその前途を不幸ならしめ、又あてもなくさ迷はしめる原因と成つてゐる。

私達がこの原野をさ迷ふにあつて注意すべき事はそのさ迷ふこと自身が甘味であることである。美しきものを求めてさ迷ふ原野は或魅惑をもつ、

この不幸の中に止まる事は決して不愉快な事ではない。しかし私は今暫くそれより脱れやう。そして直接「詩」に面する前に「言葉」に觸れその最も無味なる言語音響について、或は概念的言語について考察の眼を向けて見たい。

## 二

言語音響についての研究はその殆んど凡てが從來音響に關する實驗心理學的研究であるが故に詩については餘りに遠いものであり私達は寧ろそこから何物をも期待できないかの様ではある。しかし只私達はそこから研究の將來への豫想と希望を偷見することはできるであらう。先づ私達の決定はいそぐ——或は既に自分勝手に決定してゐる——母音及子音の區別についても未だ激しき意見の隔

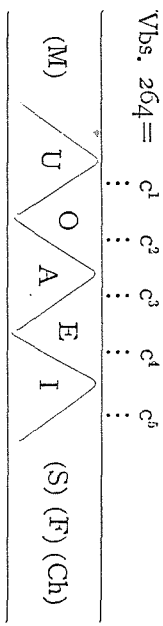
たりをもつて論争の中にある。例へばトレンデン  
 ンブルンの“Vokale sind rein periodische Klänge  
 stimulative Konsonanten sind Klanggemische.”に於  
 ける考へ方々スツンンの“Vokale sind sprachlich  
 herstellbare Klänge oder Geräusche mit aussergepr-  
 ägter Führung, Konsonanten aber sprachlich herste-  
 llbare Geräusche ohne aussergeprägte Führung.”に

於ける考へ方は一方はそれを雑音とし一方は之  
 れを雑音とせる如き根本的對立となしてゐる。  
 或はテツロメルの如きは單に生理的に區別して  
 “Vokalsind Laute mit grösster orale raperture, Kons-  
 onantenLaute mit oraler Enge oder oralem Versch-  
 luss.”としてゐる。この事は未だ雑音と雑音の區  
 別すらが決定的確定をもつには多少の疑を有し又  
 母音そのもの成生の根據につらてすゞフツトが

告げてゐる如く論争の終結を見るには途程遠いも  
 のであることに關連して研究の前途を暗くしてゐ  
 る。しかし、私達はその中から凡ての研究が一つ  
 の傾向——有意識的にせよ無意識的にもせよ——  
 をもつてゐる事に注意を拂ひたい。即それは感覺  
 の他の領域との態型的關連につらて關心をもつて  
 ゐる事である。

Although it is indeed far from easy to bring  
 vision into full harmony with the other senses, we  
 have hardly reason to believe that such harmony  
 is unattainable. And it is encouraging to find, as we  
 shall, that these particular difficulties of vision do  
 not recur in the sense of sound, if our interpretation  
 of that sense is correct. Successful analysis of hear-  
 ing would then lend added weight to the prob-

ability of vision's conforming to the proposed type.  
 (65) と云ふワットの心持は凡ての此種の研究者の態度を支配してゐるかの様である。そして殊に私達の興味を禁ずるあたはざるものはこの言語に於ける母音及子音の構造を Farbenbaum の構造に並列的に或態型的調和を見出さうと試みられつゝあることである。若し遠き將來にでもそれが成功する日のあるとすれば言語の具象性の問題は全く新しき領域を得ることゝ成る。例へばケーラーに於ける如く母音及子音の配列を意識的にヘリングの色の組織に倣つて



の表を作つて c<sup>2</sup> より c<sup>5</sup> への推移について toe に於

ける o より all に於ける a を經つて father に於ける e にまで至るその逐次的推移をあたかも赤色が橙色を經て黄色に至る推移に擬らへてゐる。(26) この表はスツンプの精密なる検討によつて種々なる批評は加へられたにもせよ一つの方向を定めた點に於いて貴重であると思はれる。スツンプも彼自身の種類なる表の所々で明 hell 或は暗 dunkel の言葉を用ひ或場合には fine, dünn. の觸覺要素の言葉さへも用ひてゐる。(27) として母音明暗 Vokalhelligkeit と音響明暗 Tonhelligkeit の併行を論じ、その兩者の逆に歌はれる場合の美的不調和を注意してゐる。例へばメーターマンの „Bussied“ に於ける Fluch の句、シェーンハートの „Ode an den Unendlichen.“ に於ける Jubel, „almacht.“ に於ける Sturm, Raf, Flug. がその主調音が母音明

暗の暗き位置にあるにもかゝはらず高い音が配せられる事が歌手をして歌ひづらからしめる事を指摘してゐる。その他ブラームスの *Zigeunerlied* の九番に於ける強く又高く歌はせられる *Null* 又 *ノウエ* の *バラード* の „*Prinz Eugen*“ に於ける *Weida-Rufe* に於いて母音明暗と音響明暗の推移の相反する事等、又 *レーウエ* はこの事を寧ろ利用して *titt den Schmirbart streichen* の句でその相反性を喜劇的效果に用ひんとしたと云へ彼はのべてゐる。<sup>(25)</sup> *エーシユ* は視覺の生理的生成の順序より推論して、生物が先づ明暗、そして色彩を識別する如く、樂音と噪音に於いても先づ噪音を、そして樂音を識別するとして連續的な明暗推移を噪音のそれに、一定振動數の層性をもつ色の系列を樂音の音階に配當してゐる、そして母音はその

中間者としてその位置を定めてゐる。このことについてはマツン<sup>(26)</sup>又ブレンタノーが又既に一八九九年に *W. McDougall* が關心をもつて居り “All the elementary qualities (of tone) are contained in a single octave, which might be likened to the complete colour series, and that the differences of pitch that distinguish the same qualities in different octaves.....are of the same order as differences of extensity or voluminousness in the case of visual, factual or temperature sensation, and are due to differences in the number of sensory neurones excited.” のべてゐる。

こうした實驗心理學者の絶へざる貴重なる研究はたとひそれが満足すべき結果にまで達してゐないにせよ、或一定の方向をもつて居りしかもす

でに母音及子音の位置が單なる音響より分離し初め言語そのものとしてその知覺的態型を整へんとして、色と音の兩者の調和的組織の構成にその足並をそろへんとしてゐる事を見ることは私達にとつて感謝さるべき努力である。何故ならばこの言語の知覺的態型の組織がその領域を確立する事はその美的具象性をして音楽より獨立せしめ、又フイツシャール、ハルトマン或はフォルケルトによつてみぢめにも單なる傳達器 *Verhittel* とされた言語をして、それが單なる蓋であつたのではなくして酒でもあつた事を知ることが出来るのである。

この言語の感覺的意味に關連して、その内容的志向意味或はコーヘンに於ける如く概念に對立する相對的感情層性 *relative Gefühlsstufen* に於ける言語意味の研究は文字の形式性に更に深い問題を

提出するものである。色彩の空間に對する如く、音の時間に對する如く、言語は何に對してゐるか？ この事は私達の前に深い謎の影を投げてゐるではないか。(未完)

註

- (1) Leibnitz, *New essays concerning human understanding*, (tr. A. G. Langley)
- (2) Wundt, *Völkerpsychologie*, I, 129 f.
- (3) Cohen, *Aesthetik* dt. G., s. 358—366. 彼は彼の *Logik*, 卽ち言語の理性に對する關係は否定的であつた。  
*Logik*, dt. E., s. 14, 50, 52.
- (4) Husserl, *Logische Untersuchungen*. II. 1 teil. s. 12—14, s. 36—83, s. 295, s. 338—342.
- (5) 哲學研究、第三十號、第三一號「美の具象性」(深田博士) 參照
- (6) Helmholz, *Die Lehre von den Tonempfindungen*, s. 171.
- (7) Köhler, *Akustische Untersuchungen*, *Zeitschr. Psychol.* 1910, 54, s. 241—280, 1911, 58, s. 59—140.
- (8) Jaensch, *Die Natur der menschlichen Sprachlaute*, *Zeitschr. Sinnesphysiol.* 1913, 47, s. 219—290.
- (9) Stampf, *Die Sprachlaute* e.p.u.



- (10) Leibnitz, *ibid.* s. 285—396. 137, s. 207, s. 203, s. 295, s. 339, s. 417, s. 596.
- (11) Herder, *Über den Ursprung der Sprache.* (1772); (Cassirer er. s. 95) 7, *Aesth.* d. r. 5, s. 25, s. 83.
- (12) F. Schlegel, *Über die Sprach und Weisheit der Indier.* (Cassirer s. 96) (20) Cassirer, *ibid.* s. 17.  
7, Leibnitz' system in seinen wissenschaftlichen grundlagen.
- (13) Schelling, *Ideen zu einer Philosophie der Natur*, s. W. II (21) Palégyi, Kant und Balzano. X, s. 16, s. 43, s. 50—51.  
47. (Cassirer, 97) (22) Mahnke, Leibnizens Synthese von 'Universalmathematik und Individualmathematik. (Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung. s. 305—613.)
- (14) Humboldt, *Über die Versh. des Menschl. Sprachbaues* (Cassirer s. 98) Einleitung zum Kawi-Werk. (23) Stumpf, *ibid.* s. 101.
- (15) Cassirer, *Philosophie der Symbolischen Formen* Erster Teil. Die Sprache. (24) 7, 7.
- (16) Marty, *Untersuchung zur Grundlegung des allgemeine Gramk.* (25) H.J. Watt, 'The psychology of sound, p. 13.
- (17) Hassen, *ibid.* s. 338—340. (26) Köhler, *ibid.*
- (18) Maunther, *Beiträge zu einer Kritik der Sprache.* III Ed. (27) Stumpf, *ibid.* s. 56—59, s. 106, s. 111.
- (19) Cohen, *Kants Theorie d. Erfahrung.* s. 149—154, s. 693 —695. (28) 7 7 s. 250.
- 7, *Ethik des Reinen Willens.* s. XI, s. 209. (29) Jaensch, *ibid.*
- 7, *Kants Begründung d. Aesthetik.* s. 26—32, s. 140 (30) Alach, *Beiträge zur Analyse der Empfindungen.* s. 122.
- 7, *Logik d. r. Erkenntnis.* s. 6, s. 124—125, s. 136— (31) Brentano, *Untersuchungen zur Sinnespsychologie.* s. 111. (Wald, p. 45)
- (32) McDougall, *Physiological psychology* p. 73.